



現代日本の文学

梅崎春生 椎名麟三 集

（監修委員）
伊藤 整
井上 靖
川端 康成
三島 由紀夫
（編集委員）
足立 卷一
奥野 健男
尾崎 秀樹
北 杜夫
（五十音順）

学習研究社

現代日本の文学

33

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

檀 一 雄

織田作之助 集

田 中 英 光

昭和45年11月1日 初版発行

昭和48年5月1日 十版発行

檀 一 雄

著 者 織田作之助

田 中 英 光

発行者 古 岡 秀 人

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

郵便番号 145 振替東京142930

電話 東京(720)1111 (大代表)

印刷 大日本印刷株式会社

中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145) 学研
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学係へ、
電話は、東京(03) 720-1111 内線352,353か、東京(03)
727-1600へお願いします。



七月初め、坊津^{ぼくづ}にいた。往昔、遣唐^{けんたう}使が船出をしたところである。その小さな美しい港を見下す峠で、基地隊の基地通信に当たっていた。私は、暗号員であった。

(「桜島」)



落日に染められた桜島(「桜島」)

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com







やがて着いた対岸の砂浜に板をおろし、ひとりひとり渡って飛び下りた。ここが桜島である。海沿いの道を約一里あるいて、袴腰はかまこしというところに部隊がある。

(「桜島」)

右 南国の光漂う桜島の袴腰

忽然忽然として、視界がぱっと開けた。左側の下に海が見える。すさまじい青さで広がっている。右側はそそり立つ急坂となり、雑木雑草が茂っている。その間を白い道が、曲りながら一筋通っている。甘美な衝撃と感動が、一瞬五郎の全身をつらぬいた。

(「幻化」)

上 坊の津の静かな入り江



十本ばかりの木がばらばら生えているだけで、昔の松林の面影はほとんどない。その木に交って、白い大きな花をぶら下げた、南国風の木がある。その花の名は忘れたが、色や形にはたしかに見覚えがあった。日はすでに入り、あたり一面は黄昏である。その花は、冥府の花のように、白く垂れ下っていた。彼はその木に近づき、指で花びらをさわって見た。花はゆらゆらと揺れた。　　　　　（「幻化」）

南国特有の花、ダチュラ



五郎の視野の中で、もう丹尾の姿は豆粒ほどになっている。突然それが立ちどまる。火口をのぞいているらしい。また歩き出す。

五郎は小高い場所からかけ降りた。あいつが死ぬるものかという気分と、死ぬかもしれないという危懼が交錯して、五郎をいらいらさせている。火口の縁に、有料の望遠鏡がある。五郎はそれに取りついて、十円玉を入れる。もう丹尾は半分近くを廻っている。



やがて車は銀杏並木^{いちょう}の道を走っていた。途中で右折すると、並木は櫟^{いぶき}に変わる。櫟の巨木は医書の神経図のような形に、梢を空に散らしていた。
(「狂い風」)

八王子市 多摩丘陵の櫟並木

椎名麟三文学紀行

瀬戸内海の海岸線を走る山陽電鉄線



この私鉄は、ほとんど瀬戸内海の海岸線を走っている
ので、海が十分眺められた
からだ。静かな波は、深い
思いを抱いているのだとい
わんばかりの真剣そうな顔
つきで、ゆるく持ち上って
来ては、几帳面な規則正し
さで砂浜へくだけていた。

（「美しい女」）



私の近くで大儀そうに起き上った志村は、ぼんやりと海の方を眺めていた。その向うには霞がかかったようにA島がうす黒くうかんでいた。志村は、ふいにぼんやり云った。

「A島へでも渡ろうか。こんなとこに長くいたって仕様があらへんもん」
（「美しい女」）

上 神戸市須磨浦よりみた淡路島

左 須磨浦付近を走る山陽電鉄の車両。後方に見えるのは淡路島

（「美しい女」）





準次は、小学校の三年まで大阪で育った。
それから父と別居することになった母と
ともに、姫路市外の母の里で暮したので
あるが、勿論父はときどきやって来たし、
やって来られないときは金を送って来た。
右 麟三が生れた母の里、兵庫県飾磨郡
曾佐村（現、姫路市書写）の遠景
（「神の道化師」）

下 かつて麟三少年も通い慣れた女人堂
（姫路市書写）に通じる小道





女人堂より見た書写の家並。右手前に幼少の
麟三が育った家が見える。「神の道化師」